神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

プロトタイプカテゴリーとしての英語中間構文再考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本多, 啓, Honda, Akira メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1795

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

プロトタイプカテゴリーとしての英語中間構文再考

本　多　　啓

1　はじめに

本論は、英語の中間構文について、「プロトタイプカテゴリーである」という見方[1]を徹底させることにより、カテゴリーとしての中間構文の新たな姿を素描することを目標とする。具体的には、まず典型的な中間構文と多くの性質を共有しながらも能動と受動の対立という意味でのヴォイスという枠組み[2]では捉えられない事例を検討する。次に、「中間構文の意味構造には動作主が存在する」という見方に「動作主はプロトタイプカテゴリーである」[3]を組み合わせ、その帰結として得られる中間構文像を示す。理論的帰結としては、中間構文というカテゴリーそれ自体の存在についての批判的な再検討と、中間構文をヴォイス現象として研究することの意義の再検討を求めることになる。

本論の議論が妥当であれば、「中間構文」という名称をたとえば次の例に適用できる可能性があることになる。

(1)　a. The shelving **comes to pieces** for easy transport.　(*LDOCE*)[4]
　　b. このアジは新しいので**刺身になる**。
(2)　a. This dress **rumples** easily.
　　b. この服はすぐに**しわになる**。

2　プロトタイプカテゴリーとしての英語中間構文（1）

認知言語学は必要十分条件に基づく古典的カテゴリー観を棄却してプロトタイプ効果を捉えることができるカテゴリー観を採用しているが、プロトタイプ効果はカテゴリーとしての英語中間構文にも指摘されている。

これまでなされてきた代表的な研究[5]に基づいて中間構文の典型例の性質をまとめると、おおよそ次のようになる。

(3)　中間構文の典型例の性質
　　a. 動詞は他動詞が基本。それが自動詞のように使われている。
　　b. 主語名詞句
　　・Patient（Theme/Undergoer）である。
　　・他動詞の目的語に対応する。

c. 動作主（Agent）がいる。
　・通常は明示されない。明示される場合は *by* ではなく、*for* による。
　・（話し手を含んだ）任意の人物である。
d.（特定の時間に起こった出来事ではなく）主語の一般的な性質・属性を表すことが多い。
　・時制は通常、単純現在形。
・「～できる／～しやすい」という可能・難易の意味合いを持ちやすい。
e. 総称的。
f. 通常付加詞（*easily, well* など）や助動詞（*will, won't* など）が現れる。

これらの性質は、プロトタイプ的な中間構文の中間構文らしさに対等の資格で関わっているわけではない。たとえば（3f）は文としての情報価値という語用論上の要請や原因帰属の要件に基づくものと考えられるため、中間構文らしさに占める比重は小さいと考えられる。一方、（3b）（3c）（3d）（3e）は中間構文らしさに大きく関わっていると考えられる。また、（3a）は、中間構文をヴォイス現象と見なす上での決め手となるものである。

このプロトタイプにあてはまる事例としては次のようなものが指摘されている[6)]。

（4）a. This book reads easily.
　　b. The book sells well.
　　c. These clothes wash in warm water.
　　d. This car steers like a dream.

プロトタイプからの拡張ないし逸脱と見なされる例としては次のようなものが指摘されている[7)]。

（5）a. The new jug doesn't pour custard properly.
　　b. That corner sells magazines well.
　　（目的語をとっている。（Cf.（3a））
（6）a. This knife cuts cleanly.
　　b. That corner sells well.
　　c. The lakes continue to fish well.
　　d. This music dances better than the other one.

（主語名詞句が Patient ではない。（Cf.（3b））

（7）a. The door won’t open.

b. The door opens automatically（whenever someone approaches）.

（a: 動作主が人かドアか不明／b: 人の動作主は存在しない。（Cf.（3c））

（8）a. Your plane is now boarding at Gate 20.

b. The house sold for a million dollars.

c. The steaks you bought yesterday are cutting like butter.

（特定個人による特定の時点の出来事を指している。（Cf.（3d（3e））

（9）a. These chairs fold up.

b. Would you believe it! The car drives!

（付加詞等を伴っていない。（Cf.（3f））

さらにT & Y（2006: 367）は、次のような非能格動詞文と中間構文の近接性を指摘している。

（10）a. I don’t travel very well.

b. Some people cry easily.

c.（Koreans like to hike.）Japanese people don’t hike.

これらの文は、動詞は基本的に自動詞であり、主語は行為者であるため、通常は非能格構文と見なされるものである。しかし、これらは出来事ではなくて主語の総称的属性を指し示すものであり（(3d)）、また（a）と（b）には付加詞が生じている一方、（c）には否定語が存在することで対比により属性を示している（(3f)）。さらに（b）の場合には動作主あるいはきっかけとなる出来事の存在があり、それが主語の属性と相まって結果として文に述べられた事象を生み出すことになる（(3c)）。つまりこれらは典型的な中間構文の事例が持つ性質をすべてではないにしてもいくつかは有しており、他方で非能格構文の性質も持っているため、中間構文と非能格構文のカテゴリーとしての連続性を示す事例というわけである（T & Y（2006: 367））[8)]。

本論の第一の課題は、中間構文をプロトタイプカテゴリーと見る見方を、これまでの研究とは別の方向に推し進めることである。

3　英語中間構文の起源についての一つの仮説

上述の課題を進めるに当たって、まず英語の中間構文の起源についての仮説

を検討しておく。

英語の中間構文の発生・成立に関しては、数多くの研究が提示されている[9)]。その中で筆者の見るかぎりもっとも単純で直観的に妥当なのは、次のような能格自動詞構文[10)]に由来するとみる見方である[11)]。以下に素描を提示する。

Denison（1993: 392）は中間構文を“special case of ergative use”とする。これは中間構文の起源が（11）のような有対の能格自動詞による状態変化構文にあると見る考えである。Fellbaum（1986），Sakamoto（2001）も同様の見方をしている。

（11）The door opens.　（有対能格自動詞）

Fellbaum（1986: 6）が次例に関して指摘するように、有対自動詞による状態変化構文は、変化の原因に関して複数の解釈がありうる。

（12）　The door closes easily.　（有対能格自動詞）
　a. The door closes easily; it only takes a gust of air.[12)]
　b. The door closes easily; you just have to press down.[13)]

すなわち、英語の有対自動詞による状態変化構文は、（12a）のような、人間の動作主が関わらない場合だけでなく、（12b）のように動作主が読み込まれる場合にも用いられうる。これが中間構文成立の基盤となる。

そして英語の有対自動詞は形態的に自他同形であることから、他動詞としての再解釈が容易に行われることになる。その再解釈の結果成立するのが中間構文である。これをまとめると、次のようになる。

（13）英語中間構文の成立
　THEME ＋有対能格自動詞
　→動作主が読み込まれる
　→（自動詞と他動詞で形態論上 overt な違いがない）
　→ PATIENT ＋有対他動詞として再解釈（中間構文）

このような過程により、次のような有対他動詞に基づく中間構文が成立することになる。

（14）The door closes easily.　（有対他動詞）[14)]

中間構文がヴォイス・可能の構文として成立すると、有対他動詞からそれ以外の動詞に拡張されることになる[15)]。

（15）a. This book reads easily.
　　b. This piano plays easily.　　（無対他動詞）[16)]

これが一般に中間構文のプロトタイプとされる事例である。

中間構文の起源に関するこの仮説が妥当であるとすると、中間構文の発生・成立におけるもっとも重要な契機は次の（16）ということになる。

（16）中間構文の発生・成立におけるもっとも重要な契機は「自動詞文におけるゼロ動作主の読み込み」である。[17)]

open、*close*、*break* などの有対自動詞である能格自動詞に（16）が生じたものからいわゆる中間構文が始まっていると考えられるわけである。

そこで一つの可能性が生じる。つまり、この「ゼロ動作主の読み込み」のプロセスは、無対自動詞（非対格自動詞、非能格自動詞）にも生じうるのではないか、ということである。

以下、この点を検討していく。

4　無対非対格自動詞の中間構文

4.1　移動・変化を表す自動詞表現

前節末尾で述べた「自動詞文におけるゼロ動作主の読み込み」は実際に非対格自動詞についても起こりうるものである。

LDOCE は名詞 *piece* の項で *come to pieces* の例文として次の文と意味記述を提示している。

（17）a. The shower head just **came to pieces** in my hand.
　　（=broke into separate parts）
　　b. The shelving **comes to pieces** for easy transport.
　　（=divides into separate parts）[18)]

（17a）は（とりあえずは）通常の非対格自動詞構文の例と見て差支えないであろうが、問題は（17b）である。実はこれは中間構文の典型例の性質として示した（3）のほとんどを満たしている。

（3）の条件のうち、（17b）が満たしていないのは（a）と（f）のみである。そしてすでに述べたように（f）が中間構文の中間構文らしさに占める比重は小さいと考えられるので、問題になるのは（a）である。中間構文をヴォイス現象とみなす立場を取れば、（a）を満たしていないということは（17b）を中間構文から除外するのに十分な根拠となる。しかしながら、その立場では（17b）が典型的な中間構文と多くの共通点を有していることを捉えることができなくなる。

一方、前節で提示したのは中間構文の成立の契機を「自動詞文におけるゼロ動作主の読み込み」に求める立場であった。実はこの契機は、理論上ヴォイス現象とは独立のものである。この契機が有対自動詞に適用されれば他動詞への再解釈につながり、ヴォイス現象として認識される中間構文につながるわけである。しかしながら無対自動詞（ここでは非対格自動詞）に適用された場合には、他動詞としての再解釈は起こりようがないため、自動詞のまま中間構文としての性質を持つようになるわけである。したがってこの立場では、（17b）は、典型例ではないものの、中間構文と呼んで差支えないことになる。あるいはより正確に言えば、「中間構文」という用語を、（17b）を含むものとして使う立場が成立しうるということである。

そしてこの立場の場合、「中間構文」には能動と受動の対立という意味での「ヴォイス」の枠組みでは捉えきれない事例があると認めることになる。

ヴォイス現象でないと言えば、通常「中間構文」の周辺事例あるいは「疑似中間構文」とされる次の例も、ヴォイス現象と呼ぶには無理がある。

（18）a. This knife cuts cleanly.
　　b. The lakes　continue to fish well.　　（=（6a,c））

これらを中間構文に含める立場をとるならば、（17b）を「中間構文」に含める立場に無理はないはずである。

本論は（17b）を「中間構文」に含める立場をとる。

類例としては次のようなものがある。

（19）The whole thing **comes apart** so that you can clean it.[19)]

（20）He throws the piece across the room and starts to cry. You say, “You're feeling upset because the puzzle is difficult. You don’t like it when *the pieces don’t* **go together** *easily*, do you?”（パズルのピースが合わない）
（**GB**）[20) 21)]

（21）If resistance is felt as the needle goes in or if *the fluid does not* **go in** *easi-*

ly, then there should be concern that the needle is in a solid structure, such as the rotator cuff tendons, and the needle should be redirected.
（注射で薬液を注入するときの話）　（**GB**）[22)]

（22）Fit new bar end plugs as a final touch. *Sometimes they* **go in** *easily*, but you may have to use the palm of your hand to screw them around and around until they fit flush.（自転車のハンドルの手入れ。）　（**GB**）[23)]

（23）Try to push the end of the new unsharpened pencil into a piece of Styrofoam. *Does it* **go in** *easily*? Try this again with a piece of corrugated cardboard. *Does the unsharpened pencil* **go into** *the cardboard*?　（**GB**）[24)]

典型的な中間構文の場合と同様、動作主が明示される場合には for で示される。

（24）a. Old habits **die** hard **for** some folks, Julie.　（**GB**）[25)]
b. These muffins didn't **rise for** me.　（Alexiadou（2012; 1092））

4.2　事物の出現・発生を表す自動詞表現

次に事物の出現・発生を表す自動詞を考える。中間構文との関連を考える前に、まずは（*all*）*by itself* との共起関係について考察する。

影山（2001a: 26）は次の例を挙げて、発生を表す動詞 *happen* は *all by itself* と共起しないとしている。

（25）*The accident **happened** *all by itself.*　（影山（2001a: 26））

その一方で、L & RH（1995），丸田（1998）は、*occur, happen, appear, emerge, come* が *by itself* と自然に共起する場合があることを指摘している。

（26）The explosion **occurred/happened** *by itself*
（L & RH（1995: 296），丸田（1998: 152））

（27）a. When I was using the InterNet, the warning **appeared** *by itself* on the screen.
b. The consensus **emerged/came** *by itself* from the long discussion.
（丸田（1998: 152））

このことをどう解釈するかは、（*all*）*by itself* の意味をどう解釈するかに依存する。つまり、この句が「主語に内在する自発性・自力性によってその出来事が起こる」ということを表すと解釈するか、「動作主による行為（典型はその

出来事の生起を意図した人間による直接的な働きかけ）なしにその出来事が起こる」ということを表すと解釈するか、ということである。ここでは次の *LDOCE*（s.v. itself）の意味記述を踏まえて、後者の「動作主なしにその出来事が起こる」と解釈しておく。

（28）“without help or without a person making it work”[26)]

この解釈のもとでは、（25）と（26）（27）との対比は次のように解釈される。

（25）の *accident* は「人間による行為によって意図的に引き起こされるものではない」ということが前提とされた語である。そのため、動作主の非在を明示する *all by itself* を共起させることは、すでに前提とされていることを冗長的に述べることになり、冗長表現となって不自然になる。これは「女のおばさん」が不自然になるのと同じことである。

それに対して（26）の *explosion*、（27）の *warning*、*consensus* は、そのような前提をもたない。*explosion* は自然発生的に起こる場合もあるが、人間によって意図的に引き起こされる場合もある。つまり動作主の介在に関して中立的である。また、*warning*、*consensus* は通常は人間の意図的行為ないし意向によって生じるものであるが、機器の仕様や誤作動、あるいは議論の成り行きなどにより、関与者の意図的行為や意向と独立に生じることもある。それゆえこれらは動作主の非在を明示する（*all*）*by itself* と共起しても冗長表現とは解釈されず、また矛盾表現にもならず、容認可能になる。

そして、動詞に目を向ければ、*by itself* を含む（26）（27）が冗長表現や矛盾表現にならずに容認されるということは、これらの動詞は事物の発生が人間の意図による場合にも使用可能であるということを示す。つまり、これらは動作主をもつ中間構文としての用法を持つことが予測される。

実際、そのような表現は存在する。

（29）a. *Suppressing strong emotion does not* **occur** *easily*. It requires an act of forceful muscular contraction, stifled breath, and mental denial to engineer the original suppression of an emotion——the stronger the emotion, the more force required——　（**GB**）[27)]

b. It is not necessary for students to try to learn the text by heart. *It*（=memorizing the text）*will* **happen** *easily if they follow this procedure.*　（**GB**）[28)]

c. ... *consensus doesn't* **emerge** *easily among this crowd* ...　(**GB**)[29)]

d. *The food does not* **come** *easily*, but its fats and proteins offer strength; and it is best enjoyed in company——another hedge against the long winters. Perhaps because *food doesn't* **come** *easily* here, good (and tireless) cooks are highly prized.　(**GB**)[30)]

(30) Reaching in the same way, I pulled out the head. *The tiny shoulders* **emerged** *easily*, then the scraggly legs. The firstborn wailed as I drew another infant from between Senora Valencia's thighs.　(COCA)[31)]

(31) *NONE OF this will* **happen** *easily or quickly. And it will not* **happen** *unless the United States continues to lead the effort*, because Russia's inertia and skepticism are too great.　(COCA)[32)]

5　社会的な意味で用いられる英語中間構文

英語の中間構文とフランス語の再帰中間構文（「再帰構文受動用法」）の一つの重要な違いとされるものとして、「規範」の意味の有無がある。すなわち、フランス語の再帰中間構文には「可能」の意味のほかに「規範」の意味があるのに対して、英語中間構文には「可能」だけがあって「規範」の意味はないとされている（春木（2009））。

しかし実際には、あまり指摘されることはないが、英語中間構文も「規範」に近い社会的な意味合いで使われる事例がある。谷口（2009）はCHILDESの検討に基づいて、中間構文の習得過程にある子どもと養育者のやりとり（(32)のようなもの）には、「行為の許可」に関わる中間構文があるという観察を提示している[33)]。

(32) a. Does this open?　(子どもの発話 ; this はドアを指す)

b. It doesn't open.　(養育者の発話)

中間構文が「規範」「許可」といった社会的な意味合いで用いられることの生態心理学的な動機づけとしては、「中間構文は事物のアフォーダンスを表す」[34)]、「アフォーダンスの知覚が（共同注意を通じて）社会的に達成されることがある」[35)]、そして「アフォーダンスが存在する環境が社会的に構築されることがある」ということが挙げられる。

無対の非対格自動詞と中間構文の関連を検討してきた本論の文脈で興味深いのは、次のような *go* の用法である。

（33）a. Where do the plates **go**?
　　b. The book **goes** on the top shelf.[36)]

この *go* について、*LDOCE* は“if something goes somewhere, that is its usual position”という意味記述を与えている。つまりこれらの *go* は「通常の置き場所、所定の位置、定位置」を表す。

これらの文はその物が定位置にない時に発話されるものであること、また皿や本などは人間による使用の後それ自身の力で定位置に移動するわけではなく、「片付ける」ことが必要であることを考えれば、この *go* は言及されていない動作主によって引き起こされる使役移動を指し示すものと考えるのが妥当である。

この場合の「定位置」は物の所有者がその生活との関連において事物に与えた意味づけであり、他者はその意味づけを尊重することを期待される。すなわちこの用法は、フランス語の再帰中間構文（「再帰構文受動用法」）と同様、「規範」という社会的な意味合いで使われた例と見ることができるわけである。

6　無対非能格自動詞の中間構文

中間構文の発生・成立におけるもっとも重要な契機を、本論では「自動詞文におけるゼロ動作主の読み込み」と見ている。これが有対能格自動詞に生じたものが一般に中間構文と見なされるものにつながっているわけである。そして前節ではこれが無対非対格自動詞にも生じうることを見た。本節では無対非能格自動詞の例を考える。

実はこれについては、T & Y（2006: 367）の例としてすでに（10）に言及した中に現れている。すなわち次の例である。

（10b）Some people **cry** easily.

これについて Y & T（2004: 317）には次のように述べられている。

（34）It is worth observing here that if English had a transitive verb with the meaning ‘do something which causes a person to cry’, and if this verb were to feature in [10b], the sentence would be quite unproblematic as a middle, since its subject would correspond to a transitive object. And, indeed, in spite of the fact that *cry* is not a causative verb, the interpretation of [10b] does seem to invoke some generalized causing event

which is liable to trigger the lachrymose behaviour. To this extent, the example certainly does exhibit features of middlehood.

「彼女」が泣く原因としてＹ＆Ｔが挙げている“causing event”は人間の意図的な行為に限られるものではない。しかし彼女を泣かせるべく意図的に行為している場合も含まれるわけである。彼女を泣かす目的で意図的に行為している動作主が読み込まれる場合には、典型的な中間構文の成立につながる契機が（10b）においても作用していると見ることができる。

すなわち（10b）を「中間構文」に含める立場が成立しうるわけである。実際（10b）は、意図的な動作主の存在が読み込める限りにおいて、中間構文の典型例が持つ性質である（3）を、無対非対格自動詞の「中間構文」と同じ程度に満たしている。

7　ここまでのまとめ

以上の議論の要点をまとめると以下のようになる。英語中間構文は（35a）のような有対能格自動詞文においてゼロ形の動作主が読み込まれることが契機となって成立したと想定される。有対能格自動詞は同じ形の他動詞を持つので、容易に他動詞として再解釈され、ヴォイス現象として認識される「中間構文」にいたる。しかし、中間構文成立の契機であるゼロ形の動作主の読み込みというプロセス自体は、無対自動詞（非対格自動詞、非能格自動詞）にも生じうる。その結果、（35b）のような無対非対格自動詞文や（35c）のような無対非能格自動詞文が、ヴォイス現象と見なすことはできないものの、典型的とされる中間構文の事例ときわめてよく似た特性を示すことになるわけである。

（35）a. The door **closes** easily.　（有対能格自動詞／他動詞）
　　b. The shelving **comes to pieces** for easy transport.　（無対非対格自動詞）
　　c. Some people *cry* easily.　（無対非能格自動詞）

（35b）と（35c）は中間構文の成立の契機と想定される「ゼロ動作主の読み込み」が（35a）と同様に作用している。また典型的とされる中間構文の事例の持つ性質（3）のほとんどを満たしている。これらにより、（35b）と（35c）を（35a）と同様に「中間構文」に含める立場が成立する。本論はその立場をとっている。

念のために書き添えておくと、筆者はここで（35b）と（35c）に関して、「中間構文」というカテゴリーが（35a）からこれらの事例を含むように「拡張」し

ていると見なしているわけではない。中間構文成立の契機となるゼロ形の動作主の読み込みが、同時発生的に複数の事例において起こっているということである。

8　プロトタイプでない事例を議論の中心にしてカテゴリーの構造を検討することの意義

本論ではプロトタイプカテゴリーとしての中間構文を論じるのに、次のようなプロトタイプを中心にすることをあえて回避してきた。

(4)　a. This book reads easily.
　　b. The book sells well.
　　c. These clothes wash in warm water.
　　d. This car steers like a dream.

これらのプロトタイプ的な事例が「中間構文らしさ」を最大限に具現していることは確かである。しかしそのことは、見方を変えて言うと、これらの事例においては他の構文との差異も最大限になっているということでもある。そしてそのことは、英語の歴史において中間構文というものがどのようにして発生してきたかを考え上ではむしろ障害になることである。

(4) のようなはっきりとした「能動受動態」の事例が、英語の歴史の中で突然発生したとは考えにくい。むしろ、中間構文は他の構文と連続体をなしつつ生じたと考える方が自然である。あるいは、現代英語の構造を前提とする観点から見れば、中間構文と他の構文の「重なり」に当たる事例から発生したと考える方が自然である。その立場から本論では、「中間構文」と「有対能格自動詞構文」の重なりに中間構文の起源を見ている[37)]。

そして他の構文との重なりに注目することは、通常は「中間構文」と見なされない事例にも中間構文らしさを発見することを可能にする。それが本論のここまでの議論を可能にしているわけである。

9　日本語との対照 (1)

ここで、日本語との対照を見ておく。最初に問題になるのは、英語の中間構文に対応する日本語表現は何かということである。この問題についての諸見解は松瀬・今泉（2001: 207-210）にまとめられている。それに基づいてここで簡略に概観しておく。

英語の中間構文に対応する日本語の文としては、典型とされる英語の事例と

文の意味および動詞の種類を比較して、「可能文」を想定する立場がある。

（36）a. This text translates easily.
b. この文章は簡単に翻訳できる。
c. This book reads easily.
d. この本は簡単に読める。

それとは別に、さまざまな意味的な特性に基づいて、「自動詞文」を対応させる立場もある。

（37）a. This door opens easily.
b. このドアは簡単に開く。

最終的に松瀬・今泉（2001: 210）は、次のように「可能文」と「自発文」を英語中間構文に対応させている。

（37）a. This fabric washes in cold water only.
b. この生地は冷水でしか洗えない。（可能文）
c. This door opens easily.
d. このドアは簡単に開く。（自発文）
だれがやっても主語の性質がその行為遂行に責任を果たすという意味は、自動詞形があれば「自発文」の形で現われ、自動詞形がなければ「られ」という可能文の形で現われるということになる。
（松瀬・今泉（2001: 210）

本論の立場としては、まずは言わずもがなではあるが、相互に翻訳可能であるということと構文として対応関係にあるということとは別であると考える。その上で、構文の対応関係の認定に当たっては、英語中間構文と同様の仕組みで同様の意味を表すようになっているものを中間構文相当表現と見なす。

本論の見方では、英語中間構文の発生・成立の契機は自動詞文におけるゼロ動作主の読み込みであった（(16)）。それに加えて、中間構文の典型例の性質（(3)）にあるように、中間構文は可能標識を持たないにもかかわらず可能の意味を持つことが多いのであった。以上から本論では、明示的な可能標識を含まないにも関わらず、自動詞で可能の意味を表す、日本語研究で言う無標識可能表現（大崎（2005）など）を中間構文対応表現と見なす。

（39）a. This door opens easily.
　　b. このドアは簡単に開く。

（39b）の日本語文が（17b）同様に、英語中間構文の典型例の性質（(3)）の多くを満たすことを確認されたい。

日本語の無標識可能表現は有対能格自動詞に限定されると言われることがあるが[38]、実際には次のように無対自動詞や他動詞にも無標識可能の解釈は存在する。

（40）a. このドアは簡単に開く。（有対能格自動詞）
　　b. **このアジは**新しいので**刺身になる**。（無対非対格自動詞）
　　c. **あいつは**いじると**すぐに泣く**からおもしろい。[39]（無対非能格自動詞）
　　d. いくら保湿を心がけてもなかなか肌が潤わない。[40]
（無対非対格自動詞）
　　e. あの管理人は簡単には鍵を渡さない。（他動詞）

そしてこれらはすべて、ゼロ動作主の読み込み（(16)）および中間構文の典型例の性質（(3)）に照らして判断するならば、英語の中間構文に相当する例と考えて差支えないことになる。

一方で、日本語では有対の自動詞と他動詞に形態上の差異があるため、自動詞が他動詞に再解釈されることは困難である。そこで日本語の場合にはこれらは他動詞として解釈されるにはいたらない。そのため（36）のように無対他動詞を含む英語の中間構文の指し示す事柄は、日本語では別の構文である明示的な可能形式によって指し示すことになる。

また日本語では他動詞への再解釈が起こらないため、能動と受動の対立という意味でのヴォイス現象としての面も持たないことになる。

10　プロタイプカテゴリーとしての中間構文（2）

この節から本論の第二の課題に移る。「動作主が存在する」ということが中間構文の重要な性質であることが広く認識されており、このことは（3）でも捉えられている。そもそも前節までの議論の中核をなしていた想定は、中間構文の発生・成立におけるもっとも重要な契機を「自動詞文におけるゼロ動作主の読み込み」に見るというものであった。

ところで、動作主に関して言えば、この「動作主」自体がプロトタイプカテゴリーであることが明らかになっている（西村（1998），西村・野矢（2013））。

これは、「中間構文の意味構造には動作主が存在する」という際の動作主概念にも適用されてしかるべきである。

しかしながら、筆者の見る限り、これまでそのような研究はなされていない。その一つの理由は、中間構文と動作主が別の脈絡で検討されてきたことに求められるだろう。中間構文の研究がヴォイス現象として能格構文や受動態との関連で行われてきたのに対して、動作主概念は使役との関連で研究されてきたわけである。しかし、「中間構文の意味構造には動作主が存在する」と「動作主はプロトタイプカテゴリーである」を組み合わせてその帰結を検討することは可能であるし、実際なされるべきであると筆者には思われる。

そのような検討からどのような中間構文像が得られるかを探求することが本論の第二の課題である。見通しとしては、動作主のプロトタイプ性に対応する形のプロトタイプ構造が現れるであろうと予測される。

11　プロタイプカテゴリーとしての動作主

まずは西村（1998）にしたがってプロトタイプカテゴリーとしての動作主を概観しておく[41) 42)]。

典型的な動作主は意図を持って行為を行い、その意図に沿った結果が生じる場合である。出来事に対する責任も、この動作主は負うことになる。

（41）典型的な動作主

a. She opened the door for the cat to come in.　（西村（1998: 126））

b. ドアを開けた。

行為の成否の原因が、行為をする人物ではなく、その使用する道具に帰属されることがある。その場合、その道具が行為者として捉えられることになる。また行為成否の原因が帰属されることから、出来事に対する責任もこの道具に帰属されることになる。この場合、この道具も動作主と見なされることになる。

（42）道具主語（それ以外の無生物主語は略）

This key opens the door.　（西村（1998: 150））

人間が意図的に行為をしたものの、結果として生じた出来事がその人物の意図に沿わない場合がある。この場合も出来事に対する責任はこの人物に帰属される。この人物も動作主である。

（43）意図しない結果が生じる場合

a. John broke the window while playing catch with a friend.

b. 本多君は友達とキャッチボールをしていて窓を壊した／壊してしまった。（Cf. 西村（1998: 162））

意図的な行為はしていないものの（あるいはしていないがゆえに）、不注意などによって意図に沿わない結果が生じることがある。望ましくない結果の生起を抑止することを怠る、すなわち不作為という行為をした点でこの人物は行為者と捉えられ、出来事に対する責任を帰属される。この人物も動作主である[43)]。

（44）不作為・負の行為

a. George dropped the dish（accidentally / inadvertently）.

b. 本多さんは（うっかり／思わず）皿を落とした／落としてしまった。（Cf. 西村（1998: 164））

自分自身の身体部位・自分の年少の家族・自分が長として勤務する組織などに対しては人は、それらを管理する立場にあると捉えられる。そのためそれらに対して望ましくない事態が生じた際には、その人物は何の動作もしていなくても、その望ましくない事態の生起を抑止することを怠った不作為により、その人物は行為者と捉えられ、出来事に対する責任を帰属される。そのために次のような文で、見方によっては被害者にも当たる人物が使役表現の主語として現れることになる。この人物も動作主である。

（45）使役と受け身の接近

a. John（fell off the ladder and）broke his arm/leg.

b. 本多さんは（梯子から落ちて）腕／足を折った／折ってしまった。（西村（1998: 166））

c. 恵子は昨年の震災で大好きな学校を焼いてしまった。（西村（1998: 168））

（41）が動作主のプロトタイプであり、そこから離れて（45）に近づくにつれて、プロトタイプから外れていく。その人物が意図的な行為（基礎行為）を行っているか、発生した結果がその人物の意図に沿っているか、といった点で濃淡があることが動作主カテゴリーがプロトタイプ構造を構成することにつな

がる。結果として「動作主」というカテゴリーは多様な成員から構成されることになる。

12　多様な動作主に対応する多様な中間構文はあるか？

12.1　典型的な動作主（意図した結果の発生）

このような多様な動作主に対応して、それぞれを基盤とする英語中間構文は存在するだろうか。前節の分類のうち、人間が動作主になっているものから一部を取り出して検討する。

まずは意図的な行為を行ってその意図にかなう結果が発生する典型的な動作主の場合である。

（41a）She opened the door for the cat to come in.

この場合、中間構文は無理なく成立する。というより、「中間構文」のプロトタイプとされてきた事例は、ここに含まれる。

（46）a. These clothes **wash** in warm water.　（無対他動詞）
　　b. The door **closes** easily.　（有対能格自動詞／他動詞）

また、本論の前半で論じた次の例も、ここに含まれる。

（47）a. The shelving **comes to pieces** for easy transport.　（無対非対格自動詞）
　　b. Some people **cry** easily.　（無対非能格自動詞）

さらなる例としては次のものが該当する。

（48）a. Definitive conclusions on these matters do not **emerge** easily from an examination of the complex structure of property taxes around the world.
（**GB**）[44)]
　　b. The baby **sleeps for** you but not **for** me.（McConnell-Ginet（1994: 234））

12.2　意図しない結果の発生・不作為

意図的な行為を行いつつ、その意図とは別の意図しない結果が発生する状況（意図しない結果の発生）と、意図しない結果の発生を抑止することを怠る状

況（不作為）は、現実には区別することが困難である。というより、現実には両方が重なって生じることがあり、その場合には「意図しない結果の発生」と捉えるか「不作為」と捉えるかは、現実に発生している多面的な事態のどの側面に注目するかの問題になる。そこでここでは両者をまとめて論じる。

（49）a. John broke the window ...　(=(43a))
　　b. George dropped the dish（accidentally / inadvertently）.　(=(44a))

先行研究では（50d）および（51）が中間構文の例に含められている。

（50）a. A doctor bled a patient.
　　b. A patient bled profusely.
　　c. The patient was bled during the operation.
　　d. The patient **bleeds** easily.　（関（2009: 71））
（51）a. The problem with ripe fruit is that it **bruises** easily.
　　（Y & T（2004: 293））
　　b. This dress **rumples** easily.　（Complaint or **Warning**）
　　（Hatcher（1943: 13））

これらについては中間構文としてではなく、純粋な有対能格自動詞構文と見なす立場も考えられる。その傍証としては、これらが「可能」の意味を持たないこと、そして無対他動詞の例が見つかっていないことが該当するかもしれない[45)]。

しかし一方で、これらを中間構文に含める可能性を示す事実も二つある。

一つは、（51b）に対しての Hatcher の注記に“Warning”が含まれることである。これは、述べられた事態の生起を抑止する責任がこの着物を取り扱う人物に付与されることを意味する。つまり、動作主が存在するということである。次の（52）も同様である。

（52）Careful! —— the fabric **tears** very easily.　（OALD: s.v. tear1）[46)]

次の文で *if* 節に *careless* という評価語が生じていることも同様の可能性を示す。

（53）This is a bitter experience and *it* **happens** *quite easily* if you take SEO

carelessly.　（Web）[47)]

中間構文に含める可能性を示唆する第二の根拠として、動作主が *for* 句で明示される事例があることが挙げられる。

（54）This kind of glass **breaks** easily *for clumsy people*.
（Klingvall（2005: 109））

実例で *for* 句が現れるものとしては次のようなものがある。ただし、（55）は商品の使用感を投稿したカスタマーレビュー、（56）は米国版 Yahoo! 知恵袋であり、いずれも一般の人物が書きこんだいわゆる「未編集」の文ではある。

（55）a. **breaks** easily **for** young children　（Web）[48)]
（壊れては困る子どもの水遊び用のおもちゃ）
b. Also i heard *it* **breaks** *easily* **for** *other people* but mine is working fine ever since i started using one（been over 6 months）.　（Web）[49)]
（ゲーム機。壊れては困るもの。）
c. ... *The absolute only problem with this is the cap which* **breaks** *easily* **for** *me*. Other than that, its a spectacular product and YOU MUST TRY IT. ...　（Web）[50)]
（56）... so *friendship breaks easily for them* too ...　（Web）[51)]

これらが「可能」を表さないことについてコメントしておくと、「可能」の概念は基本的には、行為者にとって望ましい事態の成否に関してのみ成り立つものである。日本語の例になるが、次のようなデータがある。

（57）a. 彼は 美味しい／ * まずい ギョウザを作れた。
b. 彼は 美味しい／ まずい ギョウザを作った。　（林（2009: 141））

「まずいギョウザを作れた」は、彼があえてそのようなものを作ることを目指していた場合を除いては、不自然となる。この節で検討している例は「意図しない結果」「抑止すべき結果」の発生に関連するものであるから、「可能」概念は適用できないわけである。

動詞の種類について述べておくと、次の非能格自動詞の例は、「すぐに泣くから優しく接しなさい」といった状況で用いられる場合には本節の例に該当する。

（58）Some people **cry** easily.

ここに挙げた例、特に有対能格動詞を含む例を中間構文に含めないとしたら、「意図しない結果の発生・不作為」に関連する動作主はなぜ中間構文に現れないのか、を動作主概念との関連であらためて原理的に検討することが必要となる。

12.3　意図しない結果の発生に対する抑止力の不行使（不作為）

不作為に関わる例として特に注目しておきたいのは次の例である。

（59）It will not **happen** again.

ただしこれは否定文なので実際には「不作為の否定」すなわち「抑止力の行使」を宣言する文となっている。そして抑止力を行使する人物として話し手が想定されている。ここに存在する抑止力を行使する人物を「動作主」と言うことが妥当であるならば、この文を（周辺的な成員としてではあるが）「中間構文」カテゴリーに含めることも妥当ということになる。

13　日本語との対照（2）

ここで日本語の対照を見ておく。第 9 節同様、ここでも基本的に自動詞文を見ていく。

まずは典型的な動作主（意図した結果の発生）の例である。

（60）a. このドアは簡単に開く。　（有対能格自動詞）
　　b. このアジは刺身になる。　（無対非対格自動詞）
　　c. あいつはすぐに泣く。　（無対非能格自動詞）
　　d. あの管理人は簡単には鍵を渡さない。　（他動詞）
　　（Cf.（40））

意図しない結果の発生・不作為の例としては次のものが挙げられる。

（61）a. **iPhone は**落とすと**すぐに割れる**ので注意してくださいね
　　b. この服はすぐにしわになる
　　c. 手入れを怠ると**すぐに錆びる**ので注意が必要
　　d. **あの子は**ちょっと注意すると**すぐに泣く**ので指導が難しい。

英語の（59）に対応する日本語文としては次のものが挙げられる。

（62）今後このようなことは二度とありません。

この日本語文は不祥事を起こした後の釈明の場において、再発についての未然防止宣言として通用するものである。これに動作主が関わっていないとすればこの文は再発防止宣言としては通用しないはずである。つまりこの文にも動作主は存在するわけである。

14　tough 構文

英語中間構文との意味上の類似性が指摘される *tough* 構文について、ここで簡単に言及しておく。*tough* 構文には次のような二つの用法があることが指摘されている（Richardson（1985））。

（63）a. John is easy to please.
　　b. Lunch appointments are easy to forget.[52)]

これは本論の枠組みでは、動作主性の問題として、「意図した結果の発生」と「意図しない結果の発生・不作為」の対比に対応する曖昧性と見ることができる[53)]。

15　終わりに

15.1　結局「中間構文」とは何か？

本論冒頭で、次の文を「中間構文」と呼ぶ可能性を予告した。

（1）　a. The shelving **comes to pieces** for easy transport.
　　b. このアジは新しいので刺身になる。
（2）　a. This dress **rumples** easily.
　　b. この服はすぐにしわになる。

さらに本論では次のペアを「中間構文」に含める可能性を指摘した。

（64）a. It will not **happen** again.　　(=(59))
　　b. 今後このようなことは二度とありません。　　(=(62))

これに関しては疑念がありうるであろう。これらをすべて「中間構文」と呼んでいいのか。呼んでしまうと、「中間構文」という概念が希薄化・拡散・融解して最終的に消滅してしまうのではないか。あるいはこれは単に中間構文と他の諸構文の連続性を指摘しているにすぎないのではないか。さらには、ここで言われている動作主の存在は、語用論レベルでの読み込みを構文の意味として定着した意味論レベルの実体と取り違えているだけではないか、と。

最初の疑念に応えるために、本論の論理構造をここであらためて振り返ってみよう。本論の前半では、中間構文の成立の契機を「ゼロ形の動作主の読み込み」と想定し、それが伝統的に「中間構文」とされてきたもの以外の事例に見出せるかを検討した。そして、無対非対格自動詞や無対非能格自動詞をもつ文であっても、ゼロ形の動作主の読み込みが可能である場合には、中間構文成立の契機が生じており、なおかつ中間構文の典型例がもつ性質の多くを備えている点で、「中間構文」と呼んで差し支えないという可能性を指摘した。本論の後半では、「中間構文には動作主が存在する」という広く受け入れられている中間構文の特性と、「動作主はプロトタイプカテゴリーである」という認知意味論の動作主論を合わせることで現れる「中間構文」像を検討した。

これらに関して、「前提とされている事柄」「論理展開」のいずれかに問題があれば、本論の議論は成立しないことになる。しかし逆に、「前提」「論理」のいずれにも問題がなければ、結果として出てくる「中間構文」像は、たとえどれほど異様なものであっても、受け入れるべきものとなるはずである。これが、「中間構文」概念の希薄化・拡散・融解・消滅の危惧に対する本論の回答である。

「単に中間構文と他の諸構文の連続性を指摘しているだけ」という疑念に対しては、本論はむしろ他の構文との「連続性」というよりは「重なり」に積極的に注目しているのだと応えることになる。中間構文の出現は、他の構文としての解釈も可能な「重なり」の部分から始まったと考えるのが自然だからである。プロトタイプ的な中間構文が「中間構文らしさ」を最大限に具現したものであることは確かである。しかしそれは同時に、他のカテゴリーとの差異も極大化するようなものである。そのようなものが英語の歴史の中で突然現れたと考えるのは無理があるだろう。そこに、他の構文との「重なり」に着目する意義が生じる。また、中間構文成立の契機とみなされるものを伝統的に「中間構文」とされてきた事例以外に見出してそこに中間構文としての性質を見出すということは、従来他の構文の事例とされてきたものを「中間構文」と呼ぶことにつながる。そのようなわけで、本論は、中間構文と他の構文との「重なり」を探究してきたわけである。

「意味論と語用論の混同」という疑念に関しては使用基盤モデルおよび「意味論と語用論の連続性」を対置しておきたい。また、動作主の読み込みが意味論レベルで起こっているのか語用論レベルでの現象にとどまるのかについては、実際には判別がきわめて困難であることも指摘しておきたい。たとえば次の *close* の例が、意図的に行為する動作主としての人間を原因として持つ能格自動詞構文にとどまっているか（つまり動作主の読み込みが語用論のレベルにとどまっているか）、他動詞による中間構文に転化しているか（動作主の読み込みが構文レベルの意味として定着しているか）の判断は、この例単独では判断できないと思われる。

（65）a. The door closes easily.
　　b. This book reads easily.

構文拡張の認知プロセスをここで推測するならば、構文が *read* のような動詞に拡張して「能動受動」としての中間構文が確立した後に、あらためて *close* などの例を見直すことによって、**事後的**なメタ認知が生じて *close* の例が自覚的に「能動受動」ないし「中間構文」に分類されるわけである。そうであるならば、事後的なメタ認知が発生する前の、（65b）は存在せず（65a）のみが存在する環境では、（65a）で動作主の読み込みが語用論のレベルにとどまっていたか（動作主としての人間を原因として持つ能格自動詞構文にとどまっていたか）、動作主の読み込みが構文レベルの意味として定着していたか（他動詞による中間構文に転化していたか）を判定するのは困難と思われる。

そうであるならば、この**事後的**なメタ認知のレベルでの分類判断をさらに無対非対格自動詞や無対非能格自動詞に拡張して適用することも試みとして有益なはずである。

そもそも「中間構文」とは何か、という問いに戻る。筆者の現時点での見方は、「中間構文」というカテゴリーは、研究者コミュニティの中で社会的に構築されるものである可能性が高い、というものである。より端的に言えば、「中間構文とは何か」を問うことは、「私たち研究者は何を「中間構文」と呼びたいのか」を問うことだ、ということである。ということは、どこまでの事例を「中間構文」に含めて、どの事例をこのカテゴリーとは別のものとするかということは、「中間構文というカテゴリーはどのような構造をもっているか」を明らかにすることで客観的に決まる問題ではなく、「中間構文」を研究する研究者たちの「選択」の問題、ということになる。

ただしその選択は恣意的になされるべきではなく、根拠が必要となろう。

(3) にまとめたような中間構文の典型例の性質に依拠しつつ、どの性質により大きな比重を与えて、どの性質により小さな比重を与えるかという選択を、何らかの根拠にしたがって行う、ということになるだろう。

15.2　ヴォイス／動作主／属性

前節を踏まえて、あらためて本論の立場を検討しておこう。(3) にまとめた中間構文の典型例の性質は、次のように「ヴォイス」「動作主」「属性」「その他」の 4 つに関わるものとして分類することができる。

(66) 中間構文の典型例の性質
　a. ヴォイス　(3a, b)
　b. 動作主　(3c)
　c. 属性　(3d, e)
　d. その他　(3f)

そのうえで本論は、繰り返し述べるように英語中間構文の発生・成立におけるもっとも重要な契機を、ゼロ動作主の読み込みと見ている。

(16) 中間構文の発生・成立におけるもっとも重要な契機は「自動詞文におけるゼロ動作主の読み込み」である。

これに基づいて考えると、(プロトタイプ以外の)「中間構文」は、能動と受動の対立という意味でのヴォイス現象と重なるが、ヴォイス現象の枠からはみ出る部分が大きいというのが本論の帰結である[54)]。

他方、動作主の存在は行為と結びついており、行為による属性の発見が中間構文には関与している (本多 (2002, 2005))。すなわち本論の立場では、中間構文の特性は「その他」を除けば次の順序で重みづけがなされることになる。

(67) 動作主＞属性＞ヴォイス

これも「中間構文」というカテゴリーを見る見方に関しての、一つの選択である。

注

1）Y & T（2004）, T & Y（2006）。
2）日本語研究では「ヴォイス」に「可能」を含めることもあるが、本論では英語学の慣例にしたがい、「ヴォイス」を能動と受動の対比に限定して使用する。
3）西村（1998），西村・野矢（2013）。
4）LDOCE s.v. piece http://www.ldoceonline.com/dictionary/piece 1
5）Keyser and Roeper（1984）, Iwata（1999）, Sakamoto（2001）, T & Y（2006）, Y & T（2004）および松瀬・今泉（2001）によるまとめなど。
6）Sakamoto（2001）, T & Y（2006）, Y & T（2004）。
7）*ibid*.
8）Y & T（2004: 317）も参照のこと。
9）Jespersen（1949）, Curme（1931）, Fellbaum and Zribi-Hertz（1989）, Sakamoto（2001）, 萱原（2006）, Davidse and Heyvaert（2007: 73-74）, Denison（1993: 392）など。
10）本論では以下、「能格自動詞」を *open*, *break* のような有対自動詞（対応する他動詞がある自動詞）を指すのに用い、「非対格自動詞」を *happen*、*go* のような無対自動詞（対応する他動詞のない自動詞）を指すのに用いる。「非能格動詞」は *run*、*walk* などの自動詞に用いている。
11）Fellbaum（1986）, Denison（1993）, Sakamoto（2001）。
12）この *easily* は“at the slightest provocation, without much causation”と解釈される。
13）この *easily* は“with ease, with no difficulty”の解釈である。
14）Sakamoto（2001）の言う“unaccusative-based middle”。
15）Sakamoto（2001），萱原（2006）。
16）Sakamoto（2001）の言う“action-oriented middle”。
17）このことについての認知的基盤（生態心理学的な解釈）については本多（2002, 2005）を参照のこと。
18）LDOCE s.v. piece http://www.ldoceonline.com/dictionary/piece 1
19）LDOCE s.v. apart http://www.ldoceonline.com/dictionary/apart
20）**GB** は Google Books を指す。以下すべて同じ。
21）*Positive Discipline A-Z: 1001 Solutions to Everyday Parenting Problems,*（Jane Nelsen, Ed.D.,Lynn Lott, H. Stephen Glenn, 2007）, p.10.
22）*Examination of the Shoulder: The Complete Guide*,（Edward G. McFarland, M.D., Tae Kyun Kim, 2006）p.150.
23）*Complete Bike Maintenance*,（Fred Milson, 2002）p.145.
24）*Mighty Machines*（Shar Levine, Leslie Johnstone, 2004）p.38.
25）*The Mongoose Deception*（Robert Greer, 2009）p.139.
26）http://www.ldoceonline.com/dictionary/itself
27）*The Power of Emotion: Using Your Emotional Energy to Transform Your Life*（Michael Sky, 2002）p.38.

28）*Handing Over: NLP-based Activities for Language Learning*（Jane Revell, Susan Norman, 1999）p.67.
29）*Can God Be Trusted?: Faith and the Challenge of Evil*（John G. Stackhouse, Jr., 2000）p.75.
30）*The Ethnic Food Lover's Companion*（Eve Zibart, 2001）p.92.
31）2013 年 9 月 24 日確認。
32）2013 年 9 月 24 日確認。
33）谷口（2011）も参照のこと。
34）本多（2002, 2005）。
35）小林（1992），本多（2006, 2011, 2013）。
36）LDOCE s.v. go http://www.ldoceonline.com/dictionary/go 1
37）見方を変えて言うと、カテゴリーとしての中間構文の確立のプロセスを、「プロトタイプ的な事例から周縁的な事例へのカテゴリーの拡張」としてではなく、「周縁的な事例からプロトタイプ的な事例への拡張」ないしは「事後的に周縁的と見なされるようになる事例から事後的にプロトタイプ的と見なされるようになる事例への拡張」として見ていることになる。
38）最近の研究としてはたとえば姚（2012）など。
39）倫理上問題のある例文で恐縮ではある。
40）影山（2001a: 17）の言う「自然発生的な状態変化を表す非対格動詞」。
41）以下、日本語の例文は論旨に影響しない範囲で改変した部分がある。
42）本節で取り扱う動作主論は哲学・倫理学とも接点がある。その方面の最近の著作として古田（2013）を挙げておく。これは、意図的行為をめぐる心の哲学と非意図的行為をめぐる責任の倫理学にもとづいて、行為の全体像を描き出すことを試みた労作である。
43）この説明は「不作為」に関してのものである。「負の行為」についてはここでは省略する。
44）*International Handbook of Land and Property Taxation*（Richard Miller Bird, Naomi Enid Slack, 2004）p.1.
45）英語の中間構文を扱った研究では「動作主性の低い動詞は中間構文に現れない」という一般化が示されているが、そのことはこれに該当する。
46）http://oald8.oxfordlearnersdictionaries.com/dictionary/tear
47）http://www.pintarprogramming.com/25/Should-you-learn-SEO
48）http://www.buzzillions.com/reviews/water-t-ball-golf-value-pack-reviews 2013 年 9 月 24 日確認。
49）http://forums.epicgames.com/archive/index.php/t-914590.html 2013 年 9 月 24 日確認。
50）http://www.makeupalley.com/product/showreview.asp/ItemId=103052/1000+Kisses+Stay+on+Lipliner+in+Red+Dynamite/Rimmel/Lip+Liners 2013 年 9 月 24 日確認。
51）http://answers.yahoo.com/question/index?qid=20081102035051AA1jw0C

52）南（2013）は（63a, b）の形容詞をそれぞれ「難易度」と「頻度・傾向」を表すとし、両者の関係を「参与感」の有無に求めている（(b）では「参与感の背景化」が生じているとする）。この議論と本論の議論の関係についてはいずれあらためて検討したい。

53）ただし *tough* 構文の場合には *forget* のように無対他動詞が生じることができる。これについては検討の余地がある。

54）関連する議論として Y & T（2004: 316）も参照のこと。

参考文献

Alexiadou, A.（2012）. “Noncanonical Passives Revisited: Parmeters of Nonactive Voice,” *Linguistics* **50**（6）, 1079-1110.

Curme, G. O.（1931）. *Syntax*. Boston: D. C. Heath and Company.（*A Grammar of the English Language* Volume III）.

Davidse, K. and Heyvaert, L.（2007）. “On the Middle Voice: An Interpersonal Analysis of the English Middle,” *Linguistics*, **45**（1）, 37-83.

Denison, D.（1993）. *English Historical Syntax: Verbal Constructions*. London and New York: Longman.

Fellbaum, C.（1986）. *On the Middle Construction in English*. Indiana University Linguistics Club Publications.

Fellbaum, C. and Zribi-Hertz, A.（1989）. *The Middle Construction in French and English: A Comparative Study of its Syntax and Semantics*. Indiana University Linguistics Club Publications.

Hatcher, A. G.（1943）. “‘Mr. Howard Amuses Easy’,” *Modern Language Notes*, **58**（1）, 8-17.

Iwata, S.（1999）. “On the Status of an Implicit Arguments in Middles,” *Journal of Linguistics*, **35**, 527-553.

Jespersen, O.（1949）. *A Modern English Grammar on Historical Principles* Part III: *Syntax, Second Volume*. London: George Allen & Unwin Ltd.

Keyser, S. J. and Roeper, T.（1984）. “On the Middle and Ergative Constructions in English,” *Linguistic Inquiry*, **15**（3）, 381-416.

Klingvall, E.（2005）. “A Secret Agent in the Middle?,” *The Department of English in Lund: Working Papers in Linguistics*, **5**, 91-114.

Levin, B. and Rappaport Hovav, M.（1995）. *Unaccusativity : at the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, MA.: MIT Press.

McConnell-Ginet, S.（1994）. “On the Non-Optionality of Certain Modifiers,” In

M. Harvery and L. Santelmann（eds.）*SALT IV* 230-250. Ithaca, NY: Cornell University.

Richardson, J. F.（1985）. “Agenthood and Ease,” *CLS*, **21**（2）, 241-251.

Sakamoto, M.（2001）. “The Middle and Related Constructions in English: A Cognitive Network Analysis,” *English Linguistics*, **18**（1）, 86-110.

Taylor, J. R. and Yoshimura, K.（2006）. “The Middle Construction as a Prototype Category,” *Proceedings of the Sixth Annual Meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association*, 362-370.（『日本認知言語学会論文集第 6 巻』）.

Yoshimura, K. and Taylor, J. R.（2004）. “What Makes a Good Middle? The Role of Qualia in the Interpretation and Acceptability of Middle Expressions in English,” *English Language and Linguistics*, **8**（2）, 293-321.

大崎志保（2005）.「日本語の自動詞による可能表現――動詞制約を中心に――」.『日本語文法』5（1）, 196-211.

影山太郎（2001a）.「自動詞と他動詞の交替」.（影山（2001b: 12-39））.

影山太郎（編）（2001b）.『日英対照動詞の意味と構文』. 東京 : 大修館書店.

小林春美（1992）.「アフォーダンスが支える語彙獲得」.『言語』**21**（4）, 37-45.

萱原雅弘（2006）.「中間構文に関する通時的考察」.『東京家政学院大学紀要人文・社会科学系』**46**, 73-82.

関敬一郎（2009）.『英語中間構文のイベント構造』. 風間書房.

谷口一美（2009）.「中間構文の習得からみた構文文法的再考」.『日本認知言語学会論文集』**9**, 309-319.

谷口一美（2011）.「英語における自他交替の習得――open, move を例に――」. 大庭幸男・岡田禎之（編）『意味と形式のはざま』5-16. 東京：英宝社.

西村義樹（1998）.「行為者と使役構文」中右実・西村義樹（共著）『構文と事象構造』107-203，東京：研究社出版.

西村義樹・野矢茂樹（2013）.『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』. 東京：中央公論新社.（中公新書 2220）.

春木仁孝（2009）.「フランス語の再帰構文受動用法の一体性について――モダリティーの観点から」.『言語文化研究』**35**, 119-140. 大阪大学大学院言語文化研究科.

古田徹也（2013）.『それは私がしたことなのか：行為の哲学入門』. 東京：新曜社.

本多啓（2002）.「英語中間構文とその周辺――生態心理学の観点から――」. 西村義樹（編）『認知言語学 1：事象構造』11-36. 東京：東京大学出版会.

（シリーズ言語科学 2）.
本多啓（2005）.『アフォーダンスの認知意味論――生態心理学から見た文法現象』. 東京：東京大学出版会.
本多啓（2006）.「助動詞の Can の多義構造――＜能力可能＞と＜状況可能＞の観点から」.『英語青年』**152**（7）, 426-428.（2006 年 10 月号）.
本多啓（2011）.「共同注意と間主観性」. 澤田治美（編）『ひつじ意味論講座 5 主観性と主体性』127-148. 東京：ひつじ書房.
本多啓（2013）.「言語とアフォーダンス」. 河野哲也（編）『倫理――人類のアフォーダンス』77-103. 東京：東京大学出版会. シリーズ知の生態学的転回第 3 巻.
松瀬育子・今泉志奈子（2001）.「中間構文」.（影山（2001b: 184-211））.
丸田忠雄（1998）.『使役動詞のアナトミー：語彙的使役動詞の語彙概念構造』. 松柏社.
南佑亮（2013）.「事象と属性の接点――難易度を表す形容詞の多義性を中心に――」. 日本認知言語学会第 14 回全国大会（9 月 21 日 於：京都外国語大学）ワークショップ：認知文法における事態叙述の在り方――「事態」をどのように概念化するか――
姚艶玲（2012）.「日本語における「有対自動詞」のヴォイス性に関する考察」. 日中対照言語学会（編）,『日本語と中国語のヴォイス』191-210. 東京：白帝社.
林青樺（2009）.『現代日本語におけるヴォイスの諸相――事象のあり方との関わりから』. 東京：くろしお出版.

コーパス

Davies, Mark（2008―）. *The Corpus of Contemporary American English: 450 million words, 1990-present*. Available online at http://corpus.byu.edu/coca/.